

山城明子

止まった時間

襖をあけて、寝起きの頭で居間に入ってくる母。
その姿はいつものこと。

頭ではわかっている。
小学生の子がもう大学院生になっているのだから。
15年前までのことだと。
けれど、時は止まったまま。

母の揺れる思いを聞くのは辛くもあった。
けれどそれが私にとっては母といえることのできる時間だった。
認めて欲しかった。
ずっとずっと。

母は明日はきっとよくなるといった。
痛みから解放されたから、よくなったのかもしれない。
けれど、逝ってしまった。

私の思いが伝わることもなく。
この未消化は私の時間を止めてしまった。
思いは宙ぶらりんのまま。